



編集長「まめこ」の

『まめまめ放浪記』

「藤枝第一助産院」さんからのご紹介で
今回取材させて頂いたのは、藤枝市商店街の
一角に店を構える桐箆筒屋『横山タンス店』さん。
桐タンスって、すごいんですよ！



桐 横山タンス店

〒421-0018
静岡県藤枝市本町 4 丁目 5-29
Tel /054-641-3580
E-Mail /yokokiri@aioros.ocn.ne.jp
営業時間 / 8:30 ~ 19:00
休日 / 年中無休（但し事情により終日あり）
駐車場 / 有り

ギャラリー 桐の蔵

〒426-0067
静岡県藤枝市前島 2 丁目 28-11
Tel /054-637-3808
営業時間 / 10:00 ~ 17:00
休廊 / 月曜日（祝日の場合は営業）
駐車場 / 有り（2台）



仕上げ磨き工程

- ① 「うづくり」と呼ばれる、干したカルカヤの根を短筒状にまとめて麻糸で固く縛った道具で表面を擦り、木目を出していく。
- ② ヤシャンポーと砥の粉を混ぜた塗料を、均一に素早く塗る。
※ ①② を 3 回繰り返す。
- ③ イボタノキに寄生するイボタロウムシの幼虫が分泌した蠟を溶かして固めた「いぼたロウ」で磨いていく。

写真の中で作業されている方は、格太郎さんです。



格太郎さんの跡を継ぐ、息子の横山浩史さんが桐タンスについて教えてくれた。「桐の木は成長が早くて生命力が強く、紫の花を咲かせて木目も美しいので、神聖視されて天皇家の家紋になっています。桐材は軽くて狂いが少なく細工に適していて、耐湿・耐乾性があり、冬は暖かく夏も通気性に富みます。そんな桐材で作ったタンスは、梅雨時には湿気を吸収して膨張し隙間を塞ぎ、内部に湿気を入れずに衣服を守ってくれるんです。日本の気候に良く合った家具なんですよ。」

へえ、どつりで、嫁入り道具としても大切にされる訳だなあ。

「桐タンスは火事に強いって、聞いたことありますか？桐材自体も火に強いのですが、水をかけておけば膨張し、内部に火が入りません。外側は真っ黒になるけど、内側や衣服は何ともないんですよ。」

「桐タンスは、この辺りでヤシャンポーと呼んでる樺の木の実を煎じて作った煮汁と、京都仁科地方で取れる砥の粉（このこ）を混ぜて作った塗料で磨いていくんだけどな。毎度作る塗料の具合や、塗る季節・天気・時間によっても仕上がりが具合が変わっていくから、一番気を使うところなんだ。仕上げがタンスの価値に関わるから、普段は人に見せないんだよ。」

私が取材に伺ったとき、桐タンスはほとんど形作られて、仕上げの大事な局面にきていた。ピンと張り詰めた空気の中で、塗りの作業が手際よく進んでいく。塗料が乾くと、いぼたロウと呼ばれるものをタンスの表面に丹念に滑らせる。塗料で黄白色にくすんだ桐材が、つやつやと輝きだした。すごい……。

「綺麗だろう？これが最上の桐タンスだよ。」

誇らしげに、横山タンス店・横山格太郎さんが笑った。

桐タンスの素晴らしさを知るほど、中に入れる物にも心を配りたいと思うようになった。高級な物でなくとも、良い物を手にして大切に扱いたいと思う。そして、いつか桐タンスに収納し、子供に伝えていきたいな！大切なことを守る心まで、伝わっていくような気がした。

えっ、知らなかった！今でも火事は怖いけど、大火になり易かった昔は尚更、桐タンスが重宝がられたらどうかなあ……。

「昔は、タンスと言えば桐タンスのことを言いました。実は、藤枝は日本三大桐タンス産地だったんですよ。三代將軍徳川家光公がお浅間さん（浅間神社）を造営する時に全国から呼び寄せた職人たちが、一部藤枝に移り住んで基盤を作ったそうです。職人は減ってしまったけれど、藤枝桐タンスは静岡県の郷土工芸品に指定されています。今でも、昔と変わらない製法を守っているんですよ。」

合板の家具が広まった時代でも、父の格太郎さんは桐の無垢材を使い、木を組み、昔からの仕上げを変えなかったという。「不器用だったんですよ」と笑う浩史さんの顔は、どこか誇らしげに見えた。

「しっかりと仕事をしたいと思っただけです。そして、買って下さった方を大事にしたい。近くに寄った時には、タンスの具合を聞きに伺ったりします。そうやって、こちらが頑張っていることを伝えていくことが、信頼になつていくように思っています。」

何十年も前に横山タンス店さんで桐タンスを購入された方が、子供さんに譲る為に、修理・再生をお願いしてくる。それがあっていい。作り手から作り手へ、そして使い手へ：静かに脈々と受け継がれていく技と心。これが「伝統」ってことなのかな……。